

## 列王記第一18-19章 「対決の預言者」

### 1A 霊の対戦 18

#### 1B アハブとの対面 1-19

##### 1C 預言者をかかまう僕 1-15

##### 2C 煩わす張本人 16-19

#### 2B ヤハウエの立証 20-40

##### 1C 空しい騒がしさ 20-29

##### 2C 主の祭壇 30-40

#### 3B 七度の祈り 41-46

### 2A 主の僕の燃え尽き 19

#### 1B 落胆 1-18

##### 1C 恐れ 1-10

##### 2C かすかな細い声 11-18

#### 2B 使命の更新 19-21

## 本文

列王記第一 18 章を開いてください。今日はとても内容が多いので二章分だけ読みます。私たちは前回、北イスラエルが最悪の状態に陥ったところを読みました。アハブがシドンの王の娘イゼベルと結婚し、そのバアル信仰をイスラエルに取り込みました。その時に、突如として、ギルアデのティシュベ出のエリヤがアハブに現れたのです。エリヤは、自分の仕えているイスラエルの神、ヤハウエは生きており、自分の言葉によらなければ雨は降らないと告げました。エリヤの名は、「ヤハウエこそ神」であります。バアルの神々に対して、ヤハウエこそ神であると衝突するように告げたのです。

バアルは農耕の主神であるとされ、雨を降らすのもバアルによると信じられていました。したがって、主は雨を降らせないことによって、そのバアルに対する裁きを行なっておられました。また、イスラエルが主に背けば、雨が降らないという呪いをモーセは告げていました。それが現に起こったのです。この言葉を告げてから、約三年経ちました。

### 1A 霊の対戦 18

#### 1B アハブとの対面 1-19

##### 1C 預言者をかかまう僕 1-15

18:1 それから、かなりたって、三年目に、次のような主のことばがエリヤにあった。「アハブに会いに行け。わたしはこの地に雨を降らせよう。」18:2 そこで、エリヤはアハブに会いに出かけた。そのころ、サマリアではききがひどかった。18:3 アハブは王宮をつかさどるオバデヤを呼び寄せ

た。・オバデヤは非常に主を恐れていた。18:4 イゼベルが主の預言者たちを殺したとき、オバデヤは百人の預言者を救い出し、五十人ずつほら穴の中にかくまい、パンと水で彼らを養った。・

主が雨を降らせると言われたので、エリヤは主に命じられたようにアハブに会いに行きます。その時に驚くべき人物がいました。オバデヤです。アハブの王宮をつかさどる人物であるにも関わらず、主を非常に恐れていた人です。思い出すのは、イラクにフセイン大統領が恐怖政治を行っていたときに、空軍の将校がジョージス・サダ(Georges Sada)という新生したクリスチャンだったということです。イラク空軍がイスラエルに対して空襲せよとフセインが命じたときに、それは技術的にできないことを、自分の首が飛ぶのではないかと思いながら話したところ、不思議にもその訴えが聞かれた、という内容を読んだ覚えがあります。彼に逆らうものなら、比喩ではなく文字通り首が飛ぶのですが、その独裁者に仕え、かつ主を恐れる僕です。

イゼベルは、主の預言者を殺す恐ろしい女でした。その中にあって、オバデヤは百人の預言者を救い出し、パンと水で養っていました。しかも、このような飢饉の時にこれだけの人を養うのは、相当の努力が必要だったことでしょう。

18:5 アハブはオバデヤに言った。「国のうちのすべての水の泉や、すべての川に行ってみよ。たぶん、馬と騾馬とを生かしておく草を見つけて、家畜を殺さないで済むかもしれない。」18:6 ふたりにこの国を二分して巡り歩くことにし、アハブはひとりで一つの道を行き、オバデヤはひとりではかの道を行った。

相当に困っていました。王自身そしてオバデヤが、自分たちで家畜のための水源を求めに行きます。

18:7 オバデヤがその道にいたところ、そこへ、エリヤが彼に会いに来た。彼にはそれがエリヤだとわかったので、ひれ伏して言った。「あなたは私の主人エリヤではありませんか。」18:8 エリヤは彼に答えた。「そうです。行って、あなたの主人に『エリヤがここにいます。』と言いなさい。」

あまりに突然の現れにオバデヤは驚いています。エリヤは、イゼベルからもアハブからも命を狙われていました。けれども、このように目の前に現れたので非常に驚いています。エリヤが現れたので、深い尊敬を持っていたのでオバデヤはひれ伏します。

けれどもエリヤは、そんなことはお構いなしに、言わなければいけないことだけを告げます。「あなたの主人に『エリヤがここにいます。』と言いなさい。」と告げます。エリヤは、純粋に預言者です。これまでも預言者は現れました。モーセも預言者でした。ダビデも預言を行ないました。けれども、彼らはイスラエルの家を治めるという、管理の務めも担っていました。預言に特化していたのはエリヤが初めてではないかと思えます。政治のことも気にせず、ただ御霊の導かれるとおりに、御霊

が示されるとおりに語ることのできる身軽な人でした。

18:9 すると、オバデヤが言った。「私がどんな罪を犯したというので、あなたはこのしもべをアハブの手に渡し、私を殺そうとされるのですか。18:10 あなたの神、主は生きておられます。私の主人があなたを捜すために、人をやらなかった民や王国は一つもありません。彼らがあなたはいないと言うと、主人はその王国や民に、あなたが見つからないという誓いをさせるのです。18:11 今、あなたは『行って、エリヤがここにいると、あなたの主人に言え。』と言われます。18:12 私があなたから離れて行っている間に、主の霊はあなたを私の知らない所に連れて行くでしょう。私はアハブに知らせに行きますが、彼があなたを見つけることができないなら、彼は私を殺すでしょう。しもべは子どもころから主を恐れています。

オバデヤがエリヤがいなくなってしまうのではないかと恐れるほど、エリヤは主の霊に満たされていた者であることが分かります。

18:13 あなたさまには、イゼベルが主の預言者たちを殺したとき、私のしたことが知らされていないのですか。私は主の預言者百人を五十人ずつほら穴に隠し、パンと水で彼らを養いました。18:14 今、あなたは『行って、エリヤがここにいる、とあなたの主人に言え。』と言われます。彼は私を殺すでしょう。」18:15 するとエリヤは言った。「私が仕えている万軍の主は生きておられます。必ず私は、きょう、彼の前に出ましょう。」

オバデヤの告げたことを、エリヤはしっかりと聞きました。すなわち、エリヤの他にも仲間のヤハウエの預言者が百人もいること。そしてアハブの側近にさえ、主を恐れる人がいたことです。エリヤは孤高の人でした。主が語られたことをそのまま語り、その通りに従っていくことをひたすら行なった人でした。しかし、これが後々、彼の心を弱くしています。彼には、主がお立てになっていた他の僕、他の仲間がいたのに、主の預言者が自分一人で他は殺されてしまった、と思いつめてしまったのです。

## 2C 煩わす張本人 16-19

エリヤがオバデヤに必ずアハブの前に出ることを確約しました。それでオバデヤは引き合いません。

18:16 そこで、オバデヤは行ってアハブに会い、彼に告げたので、アハブはエリヤに会うためにやって来た。18:17 アハブがエリヤを見るや、アハブは彼に言った。「これはおまえか。イスラエルを煩わすもの。」18:18 エリヤは言った。「私はイスラエルを煩わしません。あなたとあなたの父の家こそそうです。現にあなたがたは主の命令を捨て、あなたはバアルのあとについています。18:19 さあ、今、人をやって、カルメル山の私のところに、全イスラエルと、イゼベルの食卓につく四百五十人のバアルの預言者と、四百人のアシェラの預言者とを集めなさい。」

アハブがエリヤに、「イスラエルを煩わすもの」と言っていますが、エリヤはアハブに、「あなたこそがイスラエルを煩わしている」と言いました。エリヤの預言のせいで、三年の飢饉に見舞われました。ならば、それはエリヤがイスラエルに悪いことをしているからでしょうか？いいえ、アハブがバアル信仰を取り入れたのが災いなのです。不法が行なわれていて、平穏が保たれているのと、その不法を正すために平穏が壊されるのと、どちらを聖書は平和と呼ぶでしょうか？もちろん、後者です。イエス様は終わりの日に、平和を確立するために全世界の軍隊相手に戦争を行なわれるのです。私たちも、自分の心に乱れが起こったら、それが自分の肉や罪に対する挑戦であれば、それは真の平和を得るための過程なのだということを知る必要があります。

そして、「カルメル山」にバアルの預言者を集めます。バアルの相手の女神はアシェラの預言者も集められました。このカルメル山は、南北に走っている山脈を平地で断ち切る、東西に広がるイズレエル平原の地中海寄りに位置しています。海岸線がテルアビブから北にたどっていくと、ちょうど鼻を上押し上げたような形になっていますが、そこがカルメル山です。そこから南東に走っているのがカルメル山脈です。その先にメギドがあります。そして、イズレエル平原が広がり、東側には、南からギルボア山、モレの山、そしてタボル山があります。そして北にはガリラヤの山々が広がっています。

今上げた、山々はすべて、戦いにおいて聖書で言及されているものです。ギルボア山は、サウルとヨナタンがペリシテ人と戦い、ギルボア山で敗れ死にました。モレの山は、ギデオンと彼の率いる三百人がミデヤン人を襲撃するときに、この山を上っていきました。そしてタボル山は、デボラとバラクが、そこからイズレエル平原に陣を張る、将軍シセラに対して戦った場所です。さらに山ではありませんが、メギドではユダの王ヨシヤが、南から北上するエジプトの王ネコと戦い、そこで敗れ死んだところでもあります。実は、ここイズレエル平原は、歴史を通じていつも勢力が衝突する戦場になっていました。北はメソポタミア、南はエジプトという二つの文明を挟んだ、そのちょうど中間に位置するため、そこが戦場といつもなっていたのです。そしてヨハネの黙示録 16 章に、最後の世界大戦がメギドの丘、ハルマゲドンで行なわれると預言されています。

そして、同じところで武器を取る戦いではありませんが、霊の対戦が繰り広げられます。カルメル山は、その北にシドンがありましたが、この山脈も手伝ってこれまでバアルがシドンから伝わることはありませんでした。ところが、アハブがイゼベルをめとったので、北イスラエルに一気にバアル信仰が、防波堤が決壊したかのように、洪水のように入ってきました。そしてここカルメル山は、バアル信仰者らの礼拝場となっていました。エリヤは敢えて、敵陣のところを対戦の場として選びました。それでバアル預言者にとっても好都合だと思ったのでしょう。すぐに同意しました。

## 2B ヤハウエの立証 20-40

### 1C 空しい騒がしさ 20-29

18:20 そこで、アハブはイスラエルのすべての人に使いをやり、預言者たちをカルメル山に集めた。18:21 エリヤはみなの前に進み出て言った。「あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。もし、主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え。」しかし、民は一言も彼に答えなかった。

エリヤがすでに優勢です。この対決の場を、彼がルールを決め、そして多数のイスラエル人に挑戦を与えています。

18:22 そこで、エリヤは民に向かって言った。「私ひとりが主の預言者として残っている。しかし、バアルの預言者は四百五十人だ。

先に話したとおり、オバデヤは百人の預言者を隠していたのです。ところが、彼ははっきりと、自分独りしか預言者は残っていないと断言しています。これは彼の心の覚悟としては良いことでしょう。たった一人でも、真理は真理です。そしてたった一人でも、主がおられるなら、すべてを得ました。けれども、ごく少なくとも残りの民を主は与えておられたのです。これは、主の真実をそのまま見なかったエリヤの過ちと言えるでしょう。これが後に、彼の失望と落胆の原因となっていきます。

18:23 彼らは、私たちのために、二頭の雄牛を用意せよ。彼らは自分たちで一頭の雄牛を選び、それを切り裂き、たきぎの上に載せよ。彼らは火をつけてはならない。私は、もう一頭の雄牛を同じようにして、たきぎの上に載せ、火をつけないでおく。18:24 あなたがたは自分たちの神の名を呼べ。私は主の名を呼ぼう。そのとき、火をもって答える神、その方が神である。」民はみな答えて、「それがよい。」と言った。

民は、これは公平なルールだと思いました。

18:25 エリヤはバアルの預言者たちに言った。「あなたがたで一頭の雄牛を選び、あなたがたのほうからまず始めよ。人数が多いのだから。あなたがたの神の名を呼べ。ただし、火をつけてはならない。」18:26 そこで、彼らは与えられた雄牛を取ってそれを整え、朝から真昼までバアルの名を呼んで言った。「バアルよ。私たちに答えてください。」しかし、何の声もなく、答える者もなかった。そこで彼らは、自分たちの造った祭壇のあたりを、踊り回った。18:27 真昼になると、エリヤは彼らをあざけて言った。「もっと大きな声で呼んでみよ。彼は神なのだから。きっと何かに没頭しているか、席をはずしているか、旅に出ているのだろう。もしかすると、寝ているのかもしれないから、起こしたらよかろう。」18:28 彼らはますます大きな声で呼ばわり、彼らのならわしに従って、剣や槍で血を流すまで自分たちの身を傷つけた。18:29 このようにして、昼も過ぎ、ささげ物をささげる時まで騒ぎ立てたが、何の声もなく、答える者もなく、注意を払う者もなかった。

朝からは昼間でバアルの名を呼び求めました。何の声もなく、答える者もなかったので、エリヤはあざけり、バアルがどこかに行っているのだろう、あるいは寝ているかもしれないとあざけりました。そうすると彼らはなおのこと、大きな声で叫び、自分の身まで傷つけました。完全にエリヤが優勢です。

ここでぜひ覚えていただきたいのは、午前礼拝にも引用して神の約束の御言葉です。「私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。私たちは、さまざまな思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ…(2コリント 10:4-5)」主によって示されたこと、主によって力づけられたこと、主が推し進めてくださっているのであれば、私たちはエリヤのように攻勢なのです。攻撃側にいるのです。この時は、どんどん押していくべきです。

### 2C 主の祭壇 30-40

18:30 エリヤが民全体に、「私のそばに近寄りなさい。」と言ったので、民はみな彼に近寄った。それから、彼はこわれていた主の祭壇を建て直した。18:31 エリヤは、主がかつて、「あなたの名はイスラエルとなる。」と言われたヤコブの子らの部族の数にしたがって十二の石を取った。

エリヤは、イスラエルの神の祭壇を回復させました。かつてここでヤハウエをあがめていた人たちがいましたが、永らく、この祭壇が壊されたままになっていましたが、今、それを建て直しています。そして、今は北と南に分裂していますが、十二部族にしたがって十二の石を取っています。

18:32 その石で彼は主の名によって一つの祭壇を築き、その祭壇の回りに、ニセアの種を入れるほどのみぞを掘った。18:33 ついで彼は、たきぎを並べ、一頭の雄牛を切り裂き、それをたきぎの上に載せ、18:34 「四つのかめに水を満たし、この全焼のいけにえと、このたきぎの上に注げ。」と命じた。ついで「それを二度せよ。」と言ったので、彼らは二度そうした。そのうえに、彼は、「三度せよ。」と言ったので、彼らは三度そうした。18:35 水は祭壇の回りに流れ出した。彼はみぞにも水を満たした。

ニセアは7.6リットルなので、ニセアで15.2トルです。そして水をこれだけ注いだのは、もちろん、ヤハウエが火を降らせるその力の栄光をより大きく示したいからでした。

18:36 ささげ物をささげるところになると、預言者エリヤは進み出て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があるあなたのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行なったということが、きょう、明らかになりますように。18:37 私に教えてください。主よ。私に教えてください。この民が、あなたこそ、主よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようにしてください。」

ささげ物の頃とありますが、午後三時のことです。バアルの預言者はちょうど、イエス様が十字架につけられた時間、午前9時から午後3時頃まで祈り続けたのでしょう。そしてエリヤの番が来て、イスラエル人が午後のいけにえを捧げる時間にこの祈りを捧げました。

18:38 すると、主の火が降って来て、全焼のいけにえと、たきぎと、石と、ちりとを焼き尽くし、みぞの水もなめ尽くしてしまっ

焼き尽くしたのはいけにえやたきぎだけではありません。石までも、そして土の塵までも焼き尽くしました。そして溝の水もなめ尽くしました。相当な火力です。ヘブル書 11 章 29 節に、「私たちの神は焼き尽くす火です。」とあります。

18:39 民はみな、これを見て、ひれ伏し、「主こそ神です。主こそ神です。」と言った。18:40 そこでエリヤは彼らに命じた。「バアルの預言者たちを捕えよ。ひとりものがすな。」彼らがバアルの預言者たちを捕えると、エリヤは彼らをキシオン川に連れて下り、そこで彼らを殺した。

キシオン川は、カルメル山の北のふもとを走っています。そこで、主が偽預言者に対して命じておられる、「殺さなければいけない」という命令を執行しました。

### 3B 七度の祈り 41-46

このことを示し、そこで主が雨を降らせるということをアハブに見せます。エリヤとしては、これはアハブにヤハウエの神を伝える絶好の伝道の機会です。

18:41 それから、エリヤはアハブに言った。「上って行って飲み食いしなさい。激しい大雨の音がするから。」18:42 そこで、アハブは飲み食いするために上って行った。エリヤはカルメル山の頂上に登り、地にひざまずいて自分の顔をひざの間にうずめた。

アハブにエリヤが飲み食いを勧めたのは、イスラエルの地に雨が降ることを祝ってもらうためです。バアルの預言者は殺され、そしてヤハウエこそが神であることをアハブに知ってもらいたいと思いました。そしてエリヤ自身は、カルメル山の頂上に行き、地にひざまずいて、自分の顔をひざの間にうずめています。祈るためです。

18:43 それから、彼は若い者に言った。「さあ、上って行って、海のほうを見てくれ。」若い者は上って、見て来て、「何ともありません。」と言った。すると、エリヤが言った。「七たびくり返しなさい。」

18:44 七度目に彼は、「あれ。人の手のひらほどの小さな雲が海から上っています。」と言った。それでエリヤは言った。「上って行って、アハブに言いなさい。『大雨に閉じ込められないうちに、車を整えて下って行きなさい。』」

前回の学びで、シドンのやもめの男の子が死んで、彼は三度、生き返るように祈りましたが、ここでは七度、祈っています。若者は、地中海の方に向かって進み、エリヤが祈った後に逐一、報告しました。そして七度目によく、小さな雲が見えました。これをもって、エリヤは大雨に閉じ込められるとみなしました。ここにエリヤに与えられている情熱と、そして信仰による言葉を見ることができます。まず熱心に祈ること。そして、その中で見えてくるもので、それがわずかでも掴み取ること。これが、信仰と満ちた人の特徴です。

18:45 しばらくすると、空は濃い雲と風で暗くなり、やがて激しい大雨となった。アハブは車に乗ってイスラエルへ行った。18:46 主の手がエリヤの上に下ったので、彼は腰をからげてイスラエルの入口までアハブの前を走って行った。

すごいですね、主の手によってエリヤは車に乗っているアハブよりも先に走っていきました。イスラエルは、イスラエル平原の中央の南の部分にある町です。アハブの冬の宮殿になっていました。

## **2A 主の僕の燃え尽き 19**

### **1B 落胆 1-18**

### **1C 恐れ 1-10**

19:1 アハブは、エリヤがしたすべての事と、預言者たちを剣で皆殺しにしたことを残らずイゼベルに告げた。19:2 すると、イゼベルは使者をエリヤのところに遣わして言った。「もしも私が、あすの今ごろまでに、あなたのいのちをあの人たちのひとりのいのちのようにしなかったなら、神々がこの私を幾重にも罰せられるように。」

おそらくエリヤは、まだイスラエルにいたのでしょう。バアルの預言者をすべて殺したという知らせに対して、なおのこと怖気づくどころか、エリヤを殺すことを誓いました。彼女は主の預言者を殺した実績があります。ですから彼女の手は、自分にまで伸びるであろうとエリヤは考えたのです。

ここからエリヤの逃避行が始まります。どうして、四百五十人の預言者にあれだけ勇敢に対峙することのできたエリヤが、このたった一言の女の脅しに屈したのでしょうか？このことをじっくり考えながら読み進めていきたいと思いますが、一言でいうならば「燃え尽きた」ということです。これは、主に用いられた器であれば、多かれ少なかれ体験することです。大抵、大きな失敗をして落ち込むのではなく、むしろ成功を取っていると落ち込むのです。エリヤのように、主の大きな業を行なったのに、イゼベルがその主の顕現にひるむことのなかったという予想外れが、彼をひるませ、落胆させたのだと思われます。

主の御霊に満たされて、主の語られることに徹底的に従順、服従し、そして信仰をもって熱心に祈るという彼の姿勢は何ら非難されるべきものではありません。しかし、何か大事なことを見落とし

ていたのではないかと思います。けれども「私がひとり残されている預言者だ」と言っているところに、彼の過剰な責任感が見え隠れしています。そして、孤独であるがゆえの心の疲れを見ます。

19:3 彼は恐れて立ち、自分のいのちを救うため立ち去った。ユダのベエル・シェバに来たとき、若い者をそこに残し、19:4 自分は荒野へ一日の道のりをはいて行った。彼は、えにしだの木の陰にすわり、自分の死を願って言った。「主よ。もう十分です。私のいのちを取ってください。私は先祖たちにまさっていませんから。」

「恐れ」とは恐ろしいものです。「人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。」彼は、イゼベルの手が及ばないユダに逃げただけでなく、そのユダの南端であるベエル・シェバまで来ました。そして、そこからは落ち込み度がさらに増しています、独りになることを願う若者を残しています。そしてネゲブの荒野への道を入っていきました。そこからは水も枯渇するので、自分の命も危険です。

そこで精神的にも追い詰められて、彼はとうとう死を願いました。ここで彼が言った言葉が興味深いです。「私は先祖たちにまさっていませんから。」彼は、自分がここまで大いに神に用いられることに恐れをなしていました。けれども、主は大いに私たちに恵み、用いてくださいます。イエス様は弟子たちにこう言われました。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行なうわざを行ない、またそれよりもさらに大きなわざを行ないます。わたしが父のもとに行くからです。(ヨハネ 14:12)」

19:5 彼がえにしだの木の下で横になって眠っていると、ひとりの御使いが彼にさわって、「起きて、食べなさい。」と言った。19:6 彼は見た。すると、彼の頭のところに、焼け石で焼いたパン菓子一つと、水のはいったつぼがあった。彼はそれを食べ、そして飲んで、また横になった。

御使いが来ました。御使いは、エリヤのように神の取り扱いを受けてとても苦しんでいる人に、慰めと力づけをするべく仕えてくれます。イエス様が誘惑を受けられた時もそうでした。「イエスは四十日間荒野にいて、サタンの誘惑を受けられた。野の獣とともにおられたが、御使いたちがイエスに仕えていた。(マルコ 1:13)」

19:7 それから、主の使いがもう一度戻って来て、彼にさわって、「起きて、食べなさい。旅はまだ遠いからだ。」と言った。19:8 そこで、彼は起きて、食べ、そして飲み、この食べ物に力を得て、四十日四十夜、歩いて神の山ホレブに着いた。

この御使いは主の使いでした。受肉前のイエス・キリストです。そして、主はさらに旅をしなさいと言われましたが、これはエリヤがそう願っているのをそのままにさせたということだろうと思います。ちょうどイスラエルの民が荒野でマナを食べて生きたように、この荒野の旅をすることのできる力

を与える食物を与えられました。

なぜエリヤは、ネゲブの砂漠からさらにホレブの山まで行ったのでしょうか？エリヤにとっては、そこは自分の霊の故郷だからです。火をもって降りてこられた神が現れたところです。そこで、天使によってモーセが律法を受けたところです。そして、四十日四十夜というのも、主がイスラエルの民に与えられた荒野での四十年間に匹敵する数字です。彼は、イスラエルの民に現れた主のことを追憶し、その隠れ家を捜しにここまでやってきました。

19:9 彼はそこにあるほら穴にはいり、そこで一夜を過ごした。すると、彼への主のことばがあった。主は「エリヤよ。ここで何をしているのか。」と仰せられた。19:10 エリヤは答えた。「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」

ついに主が語られました。「ここで何をしているのか。」であります。そうです、自分が主に召されたところに留まらないで、自分の好きなところに来てしまったのです。そうですね、私に例えれば、私がここの牧会の務めを放棄して、成田空港に行き、ロサンゼルス空港まで飛行機で飛んで、コスタメサの教会に戻ってそこで一人でこっそり礼拝に出ているような感じでしょうか？霊の故郷に来たのですが、そこに神が呼ばれているのではないのです。

そして神の問いかけに対して、エリヤは答えていません。エリヤは、主の呼びかけや命令に応答するのを放棄してしまっています。その代わりに、自分が熱心に主に仕えたのに、いかに人々が主のことばに応答しなかったのか、そのことについての落胆の思いを吐露しています。そして、自分の命を狙っているという人への恐れも明かしています。

#### 2C かすかな細い声 11-18

主は優しい方です。このような我がままになっているエリヤに、優しく、彼が悟ることのできる形で付き合ってください。

19:11 主は仰せられた。「外に出て、山の上で主の前に立て。」すると、そのとき、主が通り過ぎられ、主の前で、激しい大風が山々を裂き、岩々を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風のあとに地震が起こったが、地震の中にも主はおられなかった。19:12 地震のあとに火があったが、火の中にも主はおられなかった。火のあとに、かすかな細い声があった。

これは実に面白い移行です。主は、火や風、また地震などの大きな目に見える業によって、エリヤを通して働いてくださっていました。エリヤはこれらの目覚ましい主の働きをずっと見ていました。このような働きが目によって、自分の体に入ってきて、それが刺激となって自分の内に溜まってい

ました。主が大きく働いてくださると、そこで見える徴を見ると、それは魂を喜ばせると同時に、その刺激が強すぎて魂を疲れさせていきます。

けれども、主はいつまでもエリヤにそのように関わるのではありません。ここに「かすかな細い声」とあります。主がエリヤに対して、これまでのようには劇的な奇蹟によって働きだけでなく、かすかな細い声に聞き従うことによってエリヤを用いられようとしておられるのです。

19:13 エリヤはこれを聞くと、すぐに外套で顔をおおい、外に出て、ほら穴の入口に立った。すると、声が聞こえてこう言った。「エリヤよ。ここで何をしているのか。」19:14 エリヤは答えた。「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」

エリヤは、かつてのモーセと同じように、主の御姿のすべてを見ることのないように、外套で顔をおおって外に出ました。すると、そのかすかな細い声は、再び「ここで何をしているのか。」という尋ねだったのです。ここまで主が語られたにも関わらず、エリヤは再び「私だけが残りました」と同じ事を繰り返しています。そこで主は、ご自分で答えられます。

19:15 主は彼に仰せられた。「さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、ハザエルに油をそそいで、アラムの王とせよ。19:16 また、ニムシの子エフーに油をそそいで、イスラエルの王とせよ。また、アベル・メホラの出のシャファテの子エリシャに油をそそいで、あなたに代わる預言者とせよ。19:17 ハザエルの剣をのがれる者をエフーが殺し、エフーの剣をのがれる者をエリシャが殺す。

主は、エリヤがここまでやって来たことを咎めることなく、次に行なわなければいけないことを教えられました。三つあります。一つは、当時アラムあるいはシリヤが、ベン・ハダデ二世が王でしたが、その家来であるハザエルがアラムの王となるので、彼に油を注ぎなさいというものです。そして、北イスラエルの将軍エフーに油を注ぎなさいというものです。そして、エリシャという後継の預言者を育てなさいということです。最後の三つ目はエリヤは行いましたが、初めの二つはエリシャとエリシャのともがらが行ないました。でも、エリシャが行なったことで、間接的にそれを手助けしたということもできます。

エリヤが知らなければいけなかったのは、「あなたが受け継いだエリシャが、アハブ家の滅びを行なうよ。」ということであります。王となったハザエルがイスラエルと戦うことによって、傷を負ってイズレエルに戻ります。その時にエフーに油が注がれて王となります。そしてエフーがイゼベルを殺し、バアル信仰をイスラエルから根絶させます。したがって、エリヤによってイスラエルが主に立ち返ることはしなかったが、主はさらにご自分の働きは知っておられて、それを後継者で完成する

ことを初めから知っておられたのです。ですから、エリヤがすべてを抱え込む必要はなかったのですが、それを彼は自分にすべて背負い込んでしまっていたのでした。そしてエリヤが最も見失っていたのは、次です。

19:18 しかし、わたしはイスラエルの中に七千人を残しておく。これらの者はみな、バアルにひざをかがめず、バアルに口づけしなかった者である。」

主の預言者百人だけでなく、なんとバアルにひざまずかない七千人を神は残しておられました。「私ひとりだけが」とエリヤは言い続けたのですが、それは間違っていることをはっきりと教えられました。私たちがこの視点を決して忘れてはいけません。自分だけがここを通っているのだ、という切羽詰った思いになります。だから、自分を敢えて他の兄弟姉妹、同じ重荷を持っている兄弟姉妹、同じ思いを持っている兄弟姉妹のところに持っていきます。私の場合は、牧者や宣教師たちの交わりの中に自分を持っていきます。その時はあまり何も考えないようにします。素の自分でいようとします。主が何を行われているのかを、その中で確かめます。

皆さんも決して、自分がたった独りだと思わないでください。そして肩肘を張らないでください。自分に責任を、神から与えられていない責任を背負わないでください。主は恵みの中で、着々と、少しずつご自分の事を行なっていくてくださいます。

ところでこの箇所は、パウロがローマ 11 章で引用している箇所です。ユダヤ人が福音に敵対して、かたくなにされているけれども、実はイエスを信じるユダヤ人がいて、残された者たちがいるのだという話の中で引用されました。

## 2B 使命の更新 19-21

19:19 エリヤはそこを立って行って、シャファテの子エリシャを見つけた。エリシャは、十二くびきの牛を先に立て、その十二番目のくびきのそばで耕していた。エリヤが彼のところを通り過ぎて自分の外套を彼に掛けたので、19:20 エリシャは牛をほうっておいて、エリヤのあとを追いかけて行って言った。「私の父と母とに口づけさせてください。それから、あなたに従って行きますから。」エリヤは彼に言った。「行って来なさい。私があるに何をしたというのか。」19:21 エリシャは引き返して来て、一くびきの牛を取り、それを殺し、牛の用具でその肉を調理し、家族の者たちに与えてそれを食べさせた。それから、彼は立って、エリヤについて行って、彼に仕えた。

エリシャが出てきました。その名前の意味は「私たちの神は救い」であります。イスラエルに対して神の与えられた預言者として、エリヤの働きをさらに大きくして神から任される人です。シャファテ出身ですが、ちょうどガリラヤ湖と死海の間にある、ヨルダン川沿いの町です。

そこで彼は十二くびきの牛を先に立てていました。十二もあるということは、裕福な家だったのか

もしれません。けれども、その一部を取って牛の料理を食べさせました。さらに牛の用具で火をたいて肉を調理したのです。すべて仕事をやめてエリヤに付いてきました。

エリヤは、ただ自分の外套を彼にかけたただけでした。それは預言者に与えられた権威を以降するしぐさです。エリシャはそれにすぐに気づきましたが、彼は両親のところに挨拶にいかせてくれと頼みます。エリヤは、「私があなを召したのではない。神が行なわれることだ。」と、自分で考えて行動してくれと頼みます。それでエリシャは家族と時間を過ごし、それでエリヤに付いてきました。

似たような話しがルカによる福音書9章にあります。「別の人はこう言った。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」(61-62 節)」これはエリシャより、ずいぶんと厳しい呼びかけです。家族にいとまごいさえ許していません。ここでは危急性がありました。エルサレムに主が行かなければいけないという切迫した状況がありました。それで、家の者にいとまごいさせる時間さえなかったのです。それだけ大きな犠牲を払ってイエスの弟子にならなければいけませんでした。

私たちに当てはめるならどうなるのでしょうか？主が行なわれることに応答するのは、大きな犠牲が必要です。それに応答できないからと言って、二流のクリスチャンではありません。けれども、応答する限りにおいては犠牲を覚悟しなければいけないということです。時に親のことさえも、省みることさえできない状況に置かれるかもしれません。それでも、イエス様との関係が深く、その使命が高いので、犠牲にすることもあるのです。主が後で備えてくださいますが。